

専教寺報

浄土真宗本願寺派 一乗山 専教寺

題字 大橋曾水

〒714-1201 岡山県小田郡矢掛町矢掛2033

TEL.0866-82-0488

URL:<https://www.senkyoji.com/>

E-Mail:senkyoji@senkyoji.com



其手常出、無尽之宝

住職 釋龍生

古典落語に「お血脈」

というお題の噺がある。

この落語は、浄土真宗の開祖の親鸞聖人（以下、宗祖）もお参りされたとされる長野県の善光寺というお寺が噺の舞台。善光寺に伝わるお血脈と呼ばれるはんこ、何人たりともそのはんこを額に押しせば過去の罪を問われることなく必ず極楽に往生できる、そんなご利益のあるはんこをめぐる噺である。

その内容は、善光寺のお血脈というはんこの大流行のおかげで、ほとんどの人々が亡くなると極楽に往生する

ようになる。そこで困ったのが、地獄に落ちる人々が少なくなり、不景気で食うに困った地獄の鬼たちである。鬼

たちは地獄の主である閻魔大王に打開策を相談する。すると閻魔大王は、「そのお血脈というはんこを善光寺から盗んでしまえば、地獄に落ちてくる人々が今まで通りに戻るだろう。ここは地獄だからその手の強者はゴロゴロいる。この地獄の中の誰かに盗ませよう。」と。そこで白羽の矢を立てられたのが、娑婆の世界で天下の大泥棒だった石川五右衛門。閻魔大王から指名された五右衛門は、「見事盗んでみせましよう」と、娑婆の世界に帰り、善光寺に忍び込み、見事にはんこを盗むことに成功する。しかし五右衛門はその盗んだはんこを自分の額に押す。その途端、五右衛門は極楽に往生する。

作り話が前提の落語の噺ではあるが、天下の大泥棒だった五右衛門。生前は盗賊の長として、好き勝手に生きて言わば希代の極悪人と称される。そんな五右衛門も娑婆の終は、極楽への往生を切に願っていたのであろうか。この五右衛門の生き様になぞらえた行動や心情の身勝手な滑稽さが、この落語の醍醐味の一

つであらう。しかし人間もこの迷いの世界を生きる、生きとし生けるものの一つである。秘める欲望をむき出しに世間を生きる人は少ないものの、心の内実は、五右衛門と似たり寄ったりなのかもしれない。

最近、浄土真宗本願寺派が発行する雑誌「大乘」を読んでいると、あるコラムで「其手常出、無盡之寶」という言葉に目が止まった。これは「浄土三部経」の一つ、「仏説無量寿経」（大経）の中に出てくる言葉である。そのコラムでは意訳として、「その手を出（合掌）してごらんさい。今まで気が付かなかった無尽の宝ものが出てまいりま

すよ」と訳されていた。

この言葉の読み方は、「その手よりつねに無尽の宝（云々）莊嚴の具を出す」で、本来の意味は、「（阿弥陀如来が法蔵菩薩の時）その手から、いつも尽きることのない宝（云々）などの飾りの品々

を出す（ことなど思いのままに行えた）」である。しかし私は、先のコラムの個人的な意識に強く惹かれた。先の落語の登場人物である五右衛門のように、人間は何人も貪欲、瞋恚、愚痴という三毒の煩惱から逃れる術がなく、常に支配されている存在である。それは不治の重病に冒されているようにどこまでも欲深く、腹立ちや愚かさが一生涯治ま

ることはない。黒という色を悪い意味で用いれば、人間を縦に割ろうが横に

割ろうがどこまでも黒なのである。その現実に気づいて自覚した宗祖は、人間のこと、自らのことを「煩惱具足の凡夫」や「愚悪の凡夫」と表現された。だから、阿弥陀さ

まは、そんな救われるはずのない人間を哀れんで、無尽の宝を一つだけ常に届けてくださる。それは、常に手を合わせてお念仏をいただくこと、救いの全ての功德が込められた南無阿弥陀仏（お念仏）という宝である。「そんなあなたを救いの目当てとして必ず救うから、お念仏（南無阿弥陀仏・なんまんだぶつ）をいただ

いて、安心して生きていきなさい」と。

私自身、落語に出てくる五右衛門を、滑稽に、人ごとのように笑っているが、実のところ五右衛門は、私たちの姿を写す鏡であり、私たちそのものかもしれない。このよ

うな現実を思い知らされることで、人生を生きる上で、常に謙虚さを忘れることなく、お念仏申す人生を送らせていただきたい。

参考文献

「読売新聞」

「ウィキペディア」



今、専教寺では

坊守 佐々木ひろみ

コロナ禍の今、皆様も、ご心配でご不便な日々が続いていることと思います。専教寺の行事なども、しばらくできない状況になっており、残念です。門信徒の方々に集まっていたべくとはできませんが、専教寺で取り組んでいることを、紹介しようと思います。

うことでした。専教寺は以前から「おてらおやつクラブ」に登録しており、お供えのおすそわけなどの支援をさせてもらっていました。そこで、休校中の子どもたちの力に少しでもなればと思い、「おてらおやつクラブ」を通して、専教寺と護国会から、そして仏教婦人会から、カップ麺等のすぐ食べられる食品を買って、届けさせてもらいました。支援団体の方からは、「食べ盛りの子達もいるので、大変助かります」と喜んでいただきました。

四月。永代経法要の門信徒参拝は中止でしたが、本堂内陣のお荘厳をして、寺族のみでお勤めさせていただきました。

三月と九月には、総代さんが、境内の池の掃除をしてくださいました。水を抜いたり、底の藻や汚れをとったりと重労働ですが、気持ちよくしてください、ありがたかったです。

十月。植木屋さんに、臥龍松と境内の木々の剪定してもらいました。ちょうど一年前には、矢掛放送の取材がは、矢掛放送の取材があつたなあと思ひ出しながら、手際よく作業される様子を見ていました。今年もきれいに剪定していただきました。

十一月。境内のもみじが色づき始めました。昨年お知らせし、ご協力いただいております納骨堂の建設について、各種手続きが完了し、いよいよ着工することになりました。また、報恩講法要の門信徒参拝は中止になりましたが、永代経法要同様に、本堂内陣をお荘厳し、寺族のみでお勤めさせていただきます。

最後に、家族の話になりますが、息子が二歳五ヶ月になりました。走ったり、話したりで活躍するようになり、活動の幅が広がってきました。本堂に入ることや、

任職のお勤めの声を聞いて真似をするのが好きなのです。先日、公園に連れて行くと、息子が、うんていの柱（鉄製の棒）を何気なく叩きました。

カーンと音がすると、お勤めの際に打つ鑿を思ったのでしよう、「いーじんむーごんむーごん！」（讃仏偈）と言って喜びました。鉄の棒を改めてもう一度カーンと叩き、今度は合掌までして「いーじんむーごん」と唱え出しました。この子の生活の中にも浄土真宗、阿弥陀さまのおはたらきをいただいているのだと、微笑ましく思った場面でした。

このように、専教寺では、できることを続けている日々ですが、以前の

ように通常の生活、行事が行える日ができるだけ早く訪れるように願っています。皆様も、お体に気をつけてお過ごしください。



●お知らせ●

浄土真宗本願寺派では、重点プロジェクト（貧困の克服に向けて）に取り組んでいます。これを受けて専教寺では、子どもたちを育てるために、以下の取り組みをしています。

○取組内容：貧困克服支援団体（矢掛町、倉敷市、笠岡市）への物資支援

○支援回数：年3回（2月、6月、10月）

10月は、数名のご門徒の方に声をかけてご協力いただきました。集まった物資は、備中里組を通して、支援団体へ届けました。今後、ご協力いただける方は、2月、6月、10月の15日までに、以下の物を専教寺に届けてください。（持ち込みでも宅配便でも受け付けます）少しでも構いませんので、ご協力いただけるとありがたいです。

- ・食料品（1ヶ月以上は消費期限のあるもの）
- ・玩具（小学生以下対象）
- ・文房具（新品）
- ・絵本（無記名のもの、破れのないもの）
- ・子供服（洗濯済、汚れのないもの）
- ・学習参考書

真備のギター職人

前坊守 佐々木京子

先日、NHKの「くろ旅」という番組で、倉敷市真備町在住の山岡則正さんのことが報道されました。五十六歳のギター製作の職人としての取材でした。

山岡さんは、専教寺のご門徒で幼少の頃から私共と交流がありました。笑顔がかわいい無邪気な少年時代がなつかしく思い出されます。

取材の内容は次のようなものでした。ギター製作において師匠はおらず、独学で高技術を身につけたということ、探求心の深さ、忍耐力の強さに引き込まれました。山岡さんの作るギターは、バイオリンをイメージする

独自のデザインとのこと

でした。手のひらに収まるカンナの使い分け、彫刻刀のような刀の扱いで、

微妙な曲線、曲面（アーチ）が作られていきます。

形状によって音色が変わるので、最高のアーチを

求めて十分の一ミリ単位の作業です。「木と話を

するので。木が、そこは固いよと教えてくれま

す。「技を極めた人の言葉が、山岡さんの口から

ほろほろとこぼれます。木と対話して、自分のめ

ざす音を予測し、一カ月かけて一本製作。製作場

面の随所に職人氣質があふれていました。にこり

のないまろやかな音が響き合う重厚な音色は、国

内外で活動するギタリストに注目されているそう

です。

ここまで取材が進んだ時、山岡さんから人生の転機が語られました。

妻久美子さんが急性くも膜下出血で亡くなりました。

行年三十七歳。この時、長女三歳、長男六カ

月。「自分の人生の計画に入っていないかったでき

ごとでした。」と。そして、子どものそばでできる仕事をと、ギター製作

に取り組むことになりました。しかし、四年たっ

ても売れません。山岡さんの話は続きます。「生

前、妻は『好きなことを生き生きとやってほしい。』

と言っていました。この言葉が迷いを取り除いて

くれました。不安やあせりを払拭して、応援して

くれてこそ感じました。」

試練はまだありました。

平成三十年七月、西日本豪雨災害で被災し、山岡家は屋根からボートで脱

出避難しました。家屋、ギター工房が浸水。型枠

や道具を泥水の中から、一つひとつ取り出し、家

族で「前向きにやろうよ。」と無我夢中で復興に尽力

しました。そして十カ月後、工房再開にこぎつけたのです。

今、山岡さんのギターの魅力にとりつかれたギタリストからの注文は、

数カ月待ちと聞きます。久美子さんが亡くなった

時、まだ幼かった子供は山岡さんのご両親の慈愛

深い支援もあり、長女タ

姫ちゃん、長男星偉君は

現在、共に大学生。そばにいてくれたお父さんに

感謝し、体につけて

ほしい、お父さんのギターを弾けるようになりたい

と、心やさしく健やかに成長しています。以上が、

放映された事柄です。久美子さんとの心の対

話により、則正さんは導かれて生きました。浄土

に生まれて仏さまとなつた久美子さんが、大切な

有縁の人々（親、夫、子ども）に寄り添い、喜び

や悲しみを共にしてくださり、教化（教え導くこ

と）してくださっています。則正さんは、仏さま

となった久美子さんの願いに応えた人生を歩んで

いるのです。テレビ放映の山岡さんの言葉から、

このように味わわせていただきました。よいご縁をいただきました。



永代経法要 令和2年4月26日(日)



境内池清掃奉仕 令和2年3月13日(金)、9月17日(木)
ご奉仕ありがとうございました



臥龍松保存のための寄付をお願いします

臥龍松を維持管理するには
たくさんのお金がかかります。
矢掛町の重要文化財の保存に
ぜひともご協力下さい。

一口1,000円から受付けています。
1,000円ご寄付の方には臥龍松のポストカード
をプレゼント。お寺にご連絡下さい。

※臥龍松保存の寄付はあくまで任意です。

お知らせ

1 1月厳修予定の報恩講法要、来年1月の元旦会について、国内における新型コロナウイルス感染症の感染拡大、クラスター防止のため、門信徒の参拝を中止します。

除夜会 12月31日(木) 午後11時45分～

除夜会の除夜の鐘は、鐘楼(屋外)で撞きますので、厳修いたします。
お参りの際は、必ずマスク着用の上、お参りください。